



ビールの泡に思うこと

7月×日

仕事が終わった。さあ帰ろう。バイクにまたがって小一時間。家に着いた。お風呂にはいる。ああさっぱりした。喉がカラカラだ。けどガマンガマン。家族4人が食卓に座る。子どもたちの前には水。上の子どもは特に水の味にうるさい。将来が楽しみだ。パートナーの前にはお茶。ちょっとは飲めるけど、わたしのためにビールを譲ってくれている。そしてわたしの前にはもちろんビール。今日も、一日待ちに待った瞬間が来た。「お疲れ〜!」。カチン、カチン、カチン! うまい! やっぱビールは〇ビスに限る。

* * *

贅沢と思われるかもしれませんが、わたしは20歳の頃からビールは〇ビスと決めています。バブルの頃、バブルがはじけた頃、「失われた10年」、社会はさまざまに変わりました。でも、わたしは変わらず、25年以上、〇ビスだけです。理由は簡単です。日本において本当の意味で「ビール」と呼べるものは少ないと、わたしは考えています。そして、その中でもわたしが大学生だった頃からあるのは〇ビスだけだからです。

ビール大国ドイツには「ビール純粋令」という法律があり「原材料として大麦、ホップ、酵母、水だけを認める」とされていることはよく知られています。つまり、日本でポピュラーな第3・第4のビールはもちろん、酒税法でビールとされているコーン・スターチ・米・雑穀などが入ったものも、ドイツではビールではないということです。

ところで近年、いつのまにか麦芽とホップ、酵母、水のみでつくられた「ビール」はプレミアムビールと呼ばれるようになりました。

しかし、わたしは考えます。「それってプレミアム=付加価値なの?」。ドイツで普通に「ビール」とされているものに「付加価値」があるとされ、ドイツではビールとされないものが「標準」とされること。それどころか、昨今の不況の中、

それすらも贅沢とされ、もはや酒税法によってすらビールとされていないものが、実質的に標準となっていること。「当たり前であることに付加価値があるの?」、そう考えながらあたりを見渡すと、同様のことはそこここに見られます。

国・民族・時代、そして個人によって「当たり前」はもちろん違います。しかし「当たり前」であることを、さも付加価値があるかのように言い立てることのなんと多いことでしょう。そして、それは同時に「標準」の位置を下げていくことにもつながるように思います。

そう考えた時、それは自分にもあてはまることに気づきます。

先日、遠足の時に知らない1年生が「わたし、土肥ちゃんに数学習いたかったわ」と言ってきました。「なんで」と聞くと「先輩から『土肥ちゃんの授業、わかりやすいで』って聞いてるし」と答えてくれました。すごうれしかったです。「わかる授業」をすることは、おそらくは「当たり前」のことなんですけど、当たり前であることに価値があることを感じさせられました。でも、同時にそれは「付加価値」ではないとも思います。去年担当していた生徒の一人に「先生のプリント、解答に間違いが多い」と言ってくれた子がいます。そんな時、とりあえず「間違い探すのも勉強やで!」と子どもたちには言うてごまかすのですが…。でも、そういう指摘をありがたいと思います。教員に向けて苦言を呈することは、子どもたちにはなかなかできません。だからこそ、子どもたちの苦言はとても貴重なものなんだと思います。

当たり前であることに価値を見いだしながらそれを「付加価値」とせず、苦言の中にもまた価値を見いだす、そんな生き方をしたいなあと思いつつ、〇ビスを飲み干しました。

……ところでこのコラム、〇ビスの商業に使ってくれないかなあ…。あ、商業使って、当たりのことに付加価値をつけるものではない。 (土肥いつき 高校教員)